バビロン捕囚から「12日間戦争」まで

歴史の「転轍器」としての世界宗教

東京大学名誉教授 山内昌之

同盟から戦争へ転換したイランとイスラエル

6月13日、イスラエルが始めたイランへの大規模攻撃は、米国のトランプ大統領の介入もあり、12日間でいったん停戦した。とはいえ全世界に大きな衝撃を与えた。

思い返せば、1979年のイラン・イスラム革命まで、イランとイスラエルはともに米国と同盟を結び、中東でいちばん緊密な二国間関係を維持していた。それは冷戦下の中東において稀有な、経済・軍事・情報をめぐる強固な戦略的協力関係にほかならない。このパートナーシップは、ソビエト連邦と同盟を組むエジプトやシリアなどアラブの共和国の路線とは対照的であった。

唐突ながら、かなり時代をさかのぼれば、紀元前6世紀に新バビロニア王国のネブカドネザル2世によって二度のバビロン捕囚の憂き目に遭ったユダヤ人を解放したのは、アケメネス朝ペルシア初代国王となったキュロス2世であった。

古代ギリシアの歴史家クセノポンが「驚嘆すべき人」と呼んだキュロスは、名前をいちいち思い出せないほど多くの民族・種族を支配しながら、これら支配下にある人びとの心にひたすらキュロスを喜ばせたいという願望を引き起こした、と評された大王である。クセノポンは、人びとがいつも彼の意志によって導かれることを欲した、と著書の『キュロスの教育』（松本仁助訳）で記述している。ユダヤ人は歴史の記憶として、ペルシア人に対して格別に悪い感情を持つ理由はなかったはずだ。

しかし、79年のイスラム革命後、イラン・イスラム共和国はイスラエ

ルをシオニズム国家であるとしてその存立を認めないばかりか、地球上からの根絶を公言するようになった。イスラエルにすれば、これはホロコーストの再現宣言に等しく、そのイランによる核と長距離ミサイルの開発は、イスラエルを実体的に絶滅させる脅威に直面するも同然だったのである。

他方、いまのイラン人にとってのイスラエルは、革命以前のシャー（国王）による専制統治体制を米国とともに支えてきた国家にほかならない。革命以降、現在に至る両者の関係は、シオニズム国家の存立を根底から拒否しその抹殺をいとわないイラン・イスラム政治体制の歴史的理念の出現と、イスラエルの安全保障を脅かすイランの核開発をめぐる国際的危機が複合的に進行していたのである。

やまうちまさゆき
1947年北海道生まれ。専門は中東地域研究、比較政治史、国際関係史。武蔵野大学客員教授。『スルタンガリエフの夢』（サントリー学芸賞）、『ラディカル・ヒストリー』（吉野作造賞）、『中東国際関係史研究』、『将軍の世紀』（上・下）など著書多数。2002年、司馬遼太郎賞。06年、紫綬褒章。

特集◉――世界動乱を読み解く宗教入門

これまでイスラエルは、パレスチナ（ガザ地区）のハマスやレバノンのヒズボラ、あるいはイエメンのフーシ派といったイランの代理勢力や前哨国家を相手にこそすれ、イラン本国との軍事対決を抑制していた。しかし、今回、国家対国家の正面対決に切り替えたことで、政治危機の難度は一挙に跳ね上がった。イスラエルのネタニヤフ首相は、攻撃を開始した6月13日の演説で、イラン・イスラム政治体制の転覆を公然と促すに至っている。２０１１年の「アラブの春」に始まる中東複合危機の複雑性はますます高度になり、多様を極めたわけである。

こうして見ると、１９７９年のイラン・イスラム革命はまさに歴史の「転轍器（てんてつき）」としての役割を果たしたといえよう。そして、２０２５年6月の「12日間戦争」もまた、中東複

合危機を深化させる21世紀史の「転轍器」になった大事件と後世から目されるのかもしれない。

文化と文明の中心的な力としての宗教

およそ紀元前600年から紀元700年までの間に、歴史を通じて物質的にも精神的にも力を発揮した六つの世界宗教・世界哲学が現れている。これらは、世界史の主要な転換点とほぼ同時期に出現しており、しかもそのすべてが、有名な六つの初期文明発祥地のなかから生まれているのだ。

六つの文明とは何か。それはメソポタミア、エジプト、インダス河流域、中国黄河流域、メソアメリカ（マヤやアステカなど中米地域）、アンデスのことであり、おそらくエジプトを除いて、その圏域はひとつの大きな国ではなく、小国家の連なりから成っていった。

そしてそれらの小さな国家は、より広域的な文化や文明の単位に属しており、共通の宗教シンボルや建築物を持っていた。その環境下で、人びとを苦しみから「救済」することを掲げ、イデオロギー的な「力の組織」として歴史に大きな意味を持つ世界救済宗教が生まれたのである。

この「救済」の理念とは、組織だった「世界像」とそれに対する態度を表現することであり、その理念が人びとの心をとらえたというのが、およそマックス・ウェーバーの説である（『世界宗教の経済倫理　序論』）。

この六つの世界宗教と世界哲学は、ウェーバーの表現に依拠すれば、「転轍手」として歴史の進むべき軌道を決定した。なるほど、個々の人間を動かすのは個別の利害関心であろう。しかしそれらも宗教がつくり出した「世界像」という軌道に乗っており、その上で利害のダイナミックスが人間の行為を推し進めたとウェーバーは説明する。

先ほど私が用いた「転轍器」という言葉は、歴史の大きな転換点をつくりだした事件を比喩するために、ウェーバーの「転轍手」をもじった用語である。いずれにせよ、古代に生まれた宗教的理想は、社会的発展のためのいくつか可能な路線のうち、どの道を進むべきかを決める転轍手のようなものだった、という比喩は興味深い。

この比喩について、歴史社会学者のマイケル・マンは、大著『ソーシャルパワー：社会的な〈力〉の世界歴史Ⅰ　先史からヨーロッパ文明の形成へ』（森本醇・君塚直隆訳）のな

かで、線路を切り替える前に、そもそも線路を敷く必要があるのだから、「転轍手」より「線路敷設工手」と言うべきだと指摘する。確かに、宗教は社会や歴史という地形の上に、さまざまなゲージ（軌間）の軌道を敷設してゆく。そして線路がまさに敷設される時機、そして新しいゲージへの転換の時機にこそ、その後の制度化された時期には見られないような、社会の新たな集中化や組織化や方向づけに関する自律性が現れるとマンは述べている。

さて、肝腎の六つの世界宗教と世界哲学の説明が遅れた。この六つとは、キリスト教、ギリシアのヒューマニズム哲学、ヒンドゥー教、イスラム教、仏教、儒教である。私は、マイケル・マンの『ソーシャルパワー』を参照しながら、そこに欠けている仏教をあえて加えることにした。仏教も特定の地域を超えた個人や社会の救済を説いており、また歴史の記録に残るほどの規模で広がり、高度な知性のまとまりを示したという点でも、他の宗教やギリシア哲学と共通しているからだ。

これらの信仰・信条の体系はすべて、ウェーバーのいう歴史の「転轍手」の役割を果たしており、マンが表現した「線路敷設工手」と呼ぶにも値する。そして歴史の新機軸ともいうべき性格すら帯びていた。それは、やがて明確に相異なる六つのタイプの社会が形成され、それぞれ活力と発展を示した圏域を築いていったからだ。

ここでは階級性や民族性の制約が厳しく人口も少なかったという点で、ひとまずゾロアスター教やユダヤ教を除いているが、それらでさえ、もっと古代の「力の組織」と比べれば、

より歴史的な発展性や普遍性に近づく性格を帯びていた。

歴史の「転轍手」あるいは「線路敷設工手」によって方向づけられた古典期ギリシア、中世ヨーロッパ、初期イスラム世界においては、広域の文化や文明の単位に属する国家の連合体が少なからず見られるようになる。これは基本的に現在の国家の在り方にもつながっていく。いわゆる世界救済宗教は、他のいかなる「力の組織」よりもはるかに広く地球を覆ってきたのだ。それに匹敵するものといえば、近代以降の自由主義や社会主義といった世俗イデオロギーの活力くらいであろう。

それらのなかで、ヨーロッパ、次いで北米のキリスト教の圏域が、産業革命の恩恵を受けながら、他より抜きん出た発展を遂げたことは、公平に言って否めない事実であろう。

他の圏域は近代以降、すべてその侵食を受けざるをえなかった。しかし、産業や科学の原理と成果の吸収と同化によって、この六つはふたたび相並ぶ圏域を形づくることになり、近世から近代にかけて日本のような独特の文明国家を生み出したのである。この六つは協力・共存の面をも持ちながら、対立・衝突を繰り返すことも止めず、現在に至っている。

戦争と平和のはざまの宗教

戦争と宗教との関係は、むかしから議論されてきた。モンテーニュの言葉ではないが、善き意図であっても、それが節度もなしに推進されると、人びとを非常に悪しき行動へ駆り立ててしまうものだ（『エセー』5、第19章、宮下志朗訳）。宗教と政治がからむ戦争といえば、何よりも、16世紀フランスの新旧両教徒の内戦、ユグノー戦争が思い出される。また、イスラム史でも4代の正統カリフ時代が終わってからウマイヤ朝成立に至るまでの7世紀のアラブ世界の戦争、つまり第一次内乱や、8世紀にそのウマイヤ朝を打倒したアッバース朝革命など、権力や王朝の交代には宗教宗派の正統性をめぐる戦争がつきまとった。

しかし、近代以前の戦争には、不思議なことが一点ある。それは、個人の欲得に駆られた戦争や、単純な復讐心を満足させる戦争が意外なほど少なかったことだ。また、君主や宗教的権威の寵愛に甘え、彼らにおべっかを使うために宗教を戦争に結び付ける者たちは存外少なかったのである。

むしろ、自分たちの宗教に真面目な熱意と敬虔な愛情を抱く者が使命感に駆られた場合が多い。祖国や信

仰共同体の平和と繁栄を維持したい人びとは、意外なほど、戦争への衝動を抑えたものだ。どの宗教も平和の価値を高らかに謳い、戦争を避けるように人びとに説いてきたのは、当然と言わねばならない。

だが、そうしたリーダーや共同体であっても、ひとたびその熱情に駆られて理性の箍がはずれてしまうと、往々にして不正かつ無謀な暴力に訴える者も現れた。

たとえばイスラム史では、小規模な事例ながら、第二次内乱を挙げることもできよう。世襲政権となったウマイヤ朝に対し、683年に預言者ムハンマドの姻戚イブン・ズバイルがメッカでカリフ位を宣言して、この内戦が始まった。それはイラクのクーファでシーア派のムフタールの乱も誘発し、紅海沿岸からイランにまたがる広い地域で、ほぼ10年間にわたって深刻な戦争が続いたのである。

16世紀以降の宗教戦争に由来する事例では、現在まで続く国際関係のルールや国民国家の在り方を決定づけた大規模な衝突として、三十年戦争を挙げるべきであろう。1648年のウェストファリア条約は、その総決算にほかならない。

宗教的非寛容の長い歴史

現代でも、並はずれた熱狂的信仰や原理主義に駆られて、宗教と政治の融合した権威を自負自任する者は、熱烈な信仰心で武装しながら、対立する文明の遺産を否定する事件を引き起こす。アフガニスタンのバーミヤン大仏遺跡を爆破したタリバン、シリアのパルミラ遺跡を破壊したISことイスラム国などがそうである。

そして、焚書・禁書や世俗的エリ

中国と台湾――危機と均衡の政治学

松田康博著　「台湾有事」は起こるのか？　両岸関係の過去から説き起こし、台湾海峡に今後起こりうる事態のシナリオ・プランニングをもとに、日本を含めた東アジアの来るべき未来を探る。

◎3960円

慶應義塾大学法学研究会叢書

構想なき革命――毛沢東と文化大革命の起源

高橋伸夫著　現代中国史上最大の政治運動、文化大革命。指導者が社会を暴力的に国家に立ち向かわせたのはなぜか。構想をもたない階級闘争へと毛沢東と指導者たちを導いた要因を精緻に探る一冊。

◎9350円

慶應義塾大学出版会
〒108-8346 東京都港区三田2-19-30
☎03-3451-3584/Fax03-3451-3122
https://www.keio-up.co.jp/［価格税込］

ートの排除も、宗教と政治との緊張関係にはつきものなのだ。

いわゆる焚書坑儒で知られる秦の始皇帝よりも地味ではあるが、別の古典的な例にも触れておこう。

3世紀のローマ皇帝クラウディウス・タキトゥスは、その一族だと信じた歴史家コルネリウス・タキトゥスの著作を各地の図書館にもれなく所蔵させた。しかし初期のキリスト教徒は、タキトゥスの著作に書かれた5、6箇所の些細な字句表現に目くじらを立てて、彼の労作を抹殺しようと執拗に書架を荒らしまわった。

焚書や廃棄処分の結果、いまでは代表作の『同時代史』や『年代記』の完全版は残っていない。そこで我々の読めるこの歴史家の作品は、『ゲルマニア』など岩波やちくまの文庫に収まる小品にしか過ぎない。

この手の過激派は、今日では原理主義と呼ばれる者たちであり、イスラム教徒はもとより、米国のトランプ大統領を支持する福音派プロテスタントのなかにも同類を見出すことができる。彼らはユダヤ教、ことにシオニズムに賛同するキリスト教徒でありさえすれば、聖書の理解度が浅く神話と歴史と現実を区別できない政治家でさえ、否、そうであればこそ、その資質をすぐに賞賛し美化しがちである。それはさながら、かつての君主たちのなかでも稀有な思索的人物であり、哲学的な思考に基づく落ち着いたたずまいを政治にも醸し出したユリアヌス帝を貶め、背教者だとして万事を断罪した初期の熱狂的なキリスト教徒とあまり変わらない。

ユリアヌスは、できるだけ多くの良い法律をつくり、法の支配の下で苛酷な租税や貢租を廃止して、人びとの生活を楽にしようとした。モンテーニュは、彼をアレクサンドロス大王や大スキピオに比すべき人物だと褒めちぎっている。歴史を虚心に見るならば、ユリアヌスは少なくともトランプなどとは器量が比較にもならぬ大為政者であった。

しかし、宗教を政治的善悪の基準とする者たちから見れば、オリエントでパルティア人の放った矢に当たって31歳で死んだユリアヌスは、「キリストを裏切る邪悪者」（カルケドンの司教マリスの言）であり、戦死するのも当然の報いだと断罪された。だが、ユリアヌスのペルシア遠征にも同行したある歴史家によれば、彼はキリスト教の敵対者ではあったが、自分の手を血の処刑で汚すことはなかったという。

現在の福音派キリスト教徒に限らず、超保守的なユダヤ教徒やイスラ

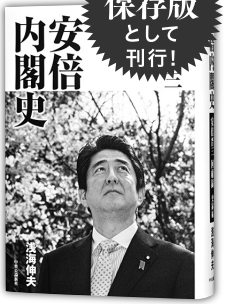
ム教シーア派の信者にも見受けられる、宗教と政治を混淆（こんこう）し、戦争を美化する者たちは、ユリアヌスの寛容に学ぶ知恵はないのだろう。皇帝は無礼な司教マリスを断罪もせず「立ち去るがいい、哀れな男よ」と呼びかけ、哲学者にふさわしい忍耐強さを保ったのである。

また、いつも名声と大衆による賞賛をあてこみ、しまいには神に列せられることを欲して火の中へ飛び込んだ犬儒派（けんじゅは）の哲学者ペレグリノスは、アントニヌス・ピウスを罵り、誹謗中傷を浴びせたものだ。2世紀のローマ五賢帝の一人であるこの皇帝が、とても優しく穏やかな人だと知っていたからだ。皇帝は、哲学の皮を被っている者、とくに人への罵りを職業にしている者を、その言葉ゆえに罰するには及ばないと寛大に考えていたという（ルキアノス『ペレグリノスの最期』内田次信・戸高和弘訳）。

世俗の規範を乗り越える宗教の政治利用

宗教は高度に重要な歴史的現象である。ある広がりを持つ社会的協力関係を維持するには、何らかの規範が必要になる。すなわち、人びとが互いにどのようにして道徳的に振る舞うべきかについて、共通した理解が必要だということだ。効果的な社会的協力関係のためには規範となる共通理解が必要になる。その担い手となるのは、しばしば宗教のようなイデオロギー運動なのである。

宗教を中心とする文化は、広範な地域にまたがって暮らす人びとに対し、集団化し、共通の規範を成り立たしめるアイデンティティ意識と協同する能力とを供給した。この能力は、国家や軍隊や生産様式に由来す

安倍晋三回顧録 史録編
安倍内閣史
社会現象となった『安倍晋三回顧録』とともに手元に置きたい一冊
あの時、政権内部で何が起きていたのか
政局運営、国会対策、皇室問題への対応、醜聞の実態……憲政史上最長だった政権の全貌を記録
完全保存版として刊行！


浅海伸夫 著
●5500円（10％税込）
中央公論新社
ご注文は書店またはブックサービス（TEL 0120-29-9625）へ
https://www.chuko.co.jp/

る能力よりもはるかに広い地域を横切って伝播し、多くの地域やそこに住む人びとを包み込んできた。イスラム教とキリスト教はとくにそうである。

換言すれば、宗教的中心を持つ文化は、人びとの間で社会的な関係を組織する特別な方法を提供したと言ってもよい。それまではその地域の小規模な家族や村落や国家といった制度の隙間に収まるだけだった数多くの集団形成のための社会的必要物を、首尾一貫した組織的な形態へと融合させる役割を果たした。そして、神殿や祭司や書記といった「力の組織」が形成されることで、それらの制度を再編成し、長期にわたって経済や政治を統制する形態をつくり上げたのである。

これらは前近代に限った話ではない。現代でも、国家レベルではイスラム政治体制を信奉するイランの法学者集団や革命防衛隊のように、そして非国家レベルではかつてのＩＳやタリバンのように、集団の相互信頼と士気を高めるイデオロギー運動は、信者ひいては住民の集合的な力を増幅するとともに、ますます増大する熱狂的な支持によって報われるはずなのだ。規範を独占することこそ、力への道であり、そしてイデオロギー的な力の最も目につく実例こそ、宗教運動なのである。

反対に、もっと世俗的な例は、初期メソポタミアと古典期ギリシアの各文化であり、20世紀においては既述のように自由主義や社会主義（マルクス主義）であろう。冷戦終結後には「歴史の終わり」として、自由主義イデオロギーの最終的勝利が言祝（ことほ）がれたことは周知の通りである。

現代もなお力を持つ宗教

しかし、現代においていかに世俗のイデオロギーが優勢であっても、とくに中東地域では宗教のイデオロギーとしての強さが目立つのである。今年の7月に入ってイスラエルの連立政権からユダヤ教超正統派の政党シャスなどが離脱し、ネタニヤフが率いる現政権の存立が危うくなっている。それは、シャスらが要求していた超正統派市民に対する兵役義務の免除を認める法律が成立しなかったからだ。こうした危機を突破するために、ネタニヤフが打った手がやはり政治と宗教を巧みにまぶした戦争という選択であった。今度の相手はガザやイランでなく、シリアの新政権であった。

ネタニヤフが、シリア政府軍はイスラム分派の一つであるドゥルーズ

派を〝虐殺〟していると批判したのは、一見すると奇異に思える。しかしネタニヤフは、虐殺中止とシリア軍のダマスクス以南からの撤退を要求してシリアとの交戦に踏み切った。

イスラエルに協力的なドゥルーズ派教徒を手駒に使うのは、皮肉にも不倶戴天の敵であるイランがヒズボラやハマスなどを前哨・前線で頤使してきた手法と似ている。イスラエル内政の危機に対し、わざわざ外政でシリア危機をつくってしのごうというのだろう。いつもながらのネタニヤフの政治手法である。

国民の宗教的凝集力を強めることで、政権の再編成と自己の政治的延命を図る彼の手法は、宗教のティピカルな政治利用にほかならず、中東においてさえ際立っている。だが、それがあまりにも頻繁に使われると、もはや歴史に新たな軌道をもたらす転轍器として機能しなくなるだろう。

さて、少し前の段落で、2世紀に小アジアのマルマラ海南岸から出たペレグリノスについて触れた。彼の哲学の宗教性や、新宗教めいた混淆思想の在り方は、新たな転轍手の形を模索する現代の世界宗教と世界哲学や、それに影響された政治の行方を考える上でも示唆的である。

パレスチナでキリスト教とめぐりあったペレグリノスは、またたくまに預言者や教団指導者、さらに会衆の長の役割をひとりでこなし、パレスチナ人の間でイエスに次ぐ扱いを受けた、と伝記作家ルキアノスは語る。新たな神として崇め、立法者として遇するパレスチナ人たちさえいたらしい。一部から「新しいソクラテス」とも呼ばれたペレグリノスは、故郷に帰ると、ギリシア人にローマへの反乱を呼びかけるだけでなく、自分に祭壇が捧げられ、自分の黄金像が立てられることを期待した。

だが結局のところ、名誉欲の虜でしかない彼は、あれこれと演出をしたものの、いざ焼身の間際になると、顔が蒼ざめ、体も震え出して、とうとう話を止めてしまったのである（『ペレグリノスの最期』）。これでは、イエスやソクラテスの衣鉢を継ぎ新たな世界宗教や世界哲学の開祖になるどころの話ではない。宗教と政治が融合した彼の野望が、歴史の転轍器となることはもはやなかった。

野心的な人物は、生前いかに意欲を発揮しても、転轍手となることも、転轍器を生むこともできない。それは歴史の流れと審判だけが決めることなのだ。しかし、現代の政治家や宗教家には、洋の東西を問わず、この真理が分からぬ人が多すぎるのではないか。